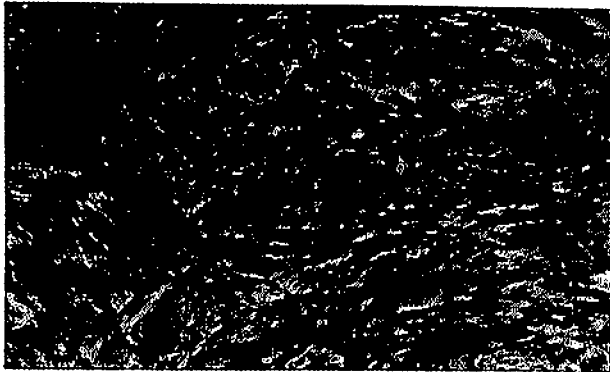
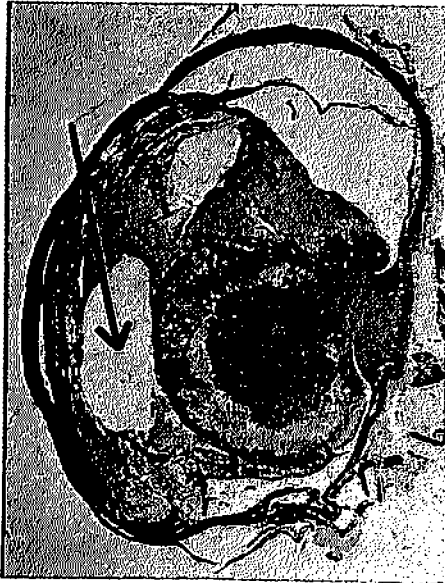


犬の眼球の腫瘍転移病変

東京農工大学病理学教室出題

第20回獣医病理学研修会標本No.331



動物：犬，コリー雑種，9才，牝。

標本：左眼球縦断面（図1， $\times 6$ ，水晶体を避けたために眼軸を通る矢状断面ではない），ホルマリン固定，パラフィン切片，H-E染色（他の2図も同様）。

臨床：東京都府中市開業宮本獣医師取り扱い。畜主によれば約2年前，他の家畜病院で乳腺腫瘍の摘出を受け，順調に治療したとの事である。死の3ヶ月程前より呼吸困難があり，時々癲癇様発作を起こし，更に左眼球の腫大突出や角膜の混濁・潰瘍形成等が認められた。1ヶ月程前，X線撮影で肺に高度な増殖性病変が発見され，病状は次第に増悪して死亡した。

剖検所見：両肺に大小の，灰白色硬度ある腫瘍結節が多発して胸腔を充満している。両腎にも同種病変が散発しているが，他の臓器組織には乳腺をも含めて著変はなく，鼠径・腋窩・腸骨等のリンパ節群も著変なく存在し，乳腺腫瘍の一般的な転移ルートを示す所見は認められない。大脳右半球前位の腹側実質内に，ほゞ梅の実大で後

方は上下二股にわかれて発育する灰白色硬度ある新生物が存在する（図2， $\times 7$ ）。左眼球硝子体内には，後極より茸状に発育する径約1cmの腫瘍結節が認められた。水晶体はやや混濁し，わずかに転位を示して存在した。送付切片では水晶体は除去されており，矢印の空所はその跡である。

組織学的所見：各所の腫瘍組織は壊死に陥る傾向が強く，腫瘍細胞は紡錘形で，束状に諸方向に増殖し，線維肉腫の組織像が主体であるが，膠原の形成は比較的少ない（図3， $\times 150$ ）。肺では粘液様軟骨様組織が散見され，一部では明瞭な類骨組織も存在した。脳や眼球の病変では肺の所見はないが，小血管周囲に腫瘍細胞が，うずまき状に配列する血管周皮腫様の所見が散発していた。

肺の病変所見は，乳腺腫瘍特に所謂混合腫瘍の転移が想起される。しかしその証拠を挙げることは困難であり，原発部位は不明の線維肉腫と診断し，国内では未だ報告の少ない眼球内転移症例であるとした。